

The Sustainable Gastronomy in Society 「SGS」

## Newsletter

JAPAN-EUROPE  
FORUM

©Pokémon. ©Nintendo/Creatures Inc./GAME FREAK inc.

## EDITORIAL

## On our way...

Covid-19の爆発的蔓延という前例なき時代がこの2023年、ついにその終わりを告げることを、世界の誰もが強く願っています。そうした状況下、私たちSGSは昨年11月に最初のエンゲージメントプラットフォームを奈良で開催し、その目標に向かって歩を進めて参りました。あらゆる人々が繋がるエンゲージメントプラットフォームの拡大は、私たちSGSにとって最も重要な目標ですが、社会的な課題に対処するためのコミュニティとのコンセンサス構築もまた重要と考えております。

本誌第2号では、2025年大阪・関西万博に焦点を当て、その魅力を同万博の羽田浩二日本政府代表にインタビューさせていただきました。

また本号では、「社会における持続可能なガストロノミー」というビジョン達成のための持続可能なフードバリューチェーン構築に向け、課題は何なのか、我々のエンゲージメントプラットフォームに焦点を当てながら考えてみました。

さらに、SGSの支援者やパートナーのご紹介、SGSのモットーである「アジアと世界における地理的表示システムの導入等、持続可能で高品質な食品生産促進のアクションを可能にする、「多層型プラットフォームの構築」にご賛同いただけるすべての皆様に、フードシステムについて再考していただくためのポイントもご紹介いたします。

---

羽田浩二氏 2025年日本国際博覧会政府代表  
インタビュー 2

---

大阪への道筋  
2025 5

---

エンゲージメント・プラットフォームはどのように運用されていくのか? 6

---

分析  
フードシステムの再考 8

---

SGSの活動に賛同するSGS  
フレンドの紹介 9-12

---

## Interview

# インタビュー

## 羽田浩二氏

2025年日本国際博覧会政府代表  
大使 外務省



2025年大阪・関西万博を作り上げていくために、羽田政府代表はどのような責任を担われ、また具体的にどのような活動を現在進めているのでしょうか？

博覧会政府代表は、国際博覧会条約で任命が義務づけられている役職で、これまで主に外国政府への万博参加働きかけや要人との会談、BIE（博覧会国際事務局）総会での準備状況の報告等を行ってきました。幸い、これまで参加表明した国は、目標の150か国に近くなっています。BIE総会にもこれまでに3回にわたり出席し、万博の準備が順調に進んでいることを説明しています。今年からはいよいよパビリオン敷地の引き渡し、建設が始まりますので、今後は出展を表明している国や国際機関からの問題提起や要望への対応を、博覧会協会等と連携して進めていくこととなります。展示内容を充実させることが求められてくる時期に入りますが、引き続き精力的に活動してまいりたいと思います。

羽田政府代表がご一緒に準備を進めておられるチームについてお教えていただけますでしょうか。どのような組織体制で、それぞれ、どのような役割を担っておられるのでしょうか？また大阪・関西万博の政府代表として、最大のチャレンジは何だとお考えでしょうか？

国際博覧会は通常、経済産業省が主管官庁として様々な活動を行っており、今回も重要な役割を果たしています。今回の万博では、これに加え2018年に国際博覧会担当大臣が任命され、内閣官房に国際博覧会推進本部が設置されました。続いて実際の準備、開催運営を行うために、2019年に「2025年日本国際博覧会協会」が設立されました。

私は2021年に政府代表に任命されましたが、同時に外務省経済局に「2025年日本国際博覧会室」が設置され、外務省の他の部署とも協力・連携して各国への働きかけ・調整などを行っています。私のオフィスも現在外務省内にあります。政府代表として、参加国・国際機関との調整は会期中、さらには万博終了後の撤収作業の間も続きます。一方で万博会期中には、世界各国から多くの要人が会場を来訪されることとなります。この機会に日本の良さを知っていただけるような「おもてなし」をすることも、私の重要な任務の一つだと考えています。

1851年の最初の万国博覧会の開催以来、万博には世界中から多くの人々が集まり、特定のテーマを中心に、特別なものや体験を共有する場となってきました。2025年大阪・関西万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」ですが、その意味するところは何でしょうか？

「いのち輝く未来社会のデザイン」は、われわれ一人一人が自らの望む生き方を考え、それぞれの可能性を最大限に発揮できるように、持続可能な社会を世界が共創していくことを目標としています。人々の価値観が多様化し、技術革新により多くのことが可能になった反面、新たな問題も提起されている現代社会において、一人一人の「いのち」が輝くような社会を目指して今何ができるか、何を未来に繋げるかを、この博覧会を通じて皆で考えていこう、そういう強いメッセージとして受け止めていただきたいと思います。

## Interview

過去に日本で開催された万博は、日本が急成長している技術や科学の分野を世界にアピールする機会となりましたが、2025年の大阪・関西万博にはどのようなことが期待できるでしょうか。

1970年の大阪万博当時、万博の主な目的は産業振興や自国のアピールでした。当時未来の夢の技術として展示された携帯電話や電気自動車、ロボット等は、既に全て実用化されており、万博をスタートラインにして、未来に向けた技術が発展してきたのは明らかです。一方で最近の万博は、各国が共通して取り組むべき課題を模索し、今後の国際社会のあり方を提示する場として位置づけられるように変わってきています。大阪・関西万博は、会場を「People's Living Lab（未来社会の実験場）」として、新たな技術やシステムを実証するための場と位置づけています。「未来社会はどうあるべきか」、「幸福な生き方とは何か」を世界中の人々と共に考え、共にデザインしていく機会になることを期待しています。

これまで日本では、1970年代から5回の万博が開催されています。今回の万博では、特定のシンボルがないと言われることもあるようですが、皆が一緒に新しい万博を作るために、市民社会はどのように貢献していくべきだとお考えでしょうか？

大阪・関西万博では、「大屋根（リング）」が「多様でありながら、ひとつ」という理念を表すシンボルとして建設されます。リングは、会場の主動線になると共に、雨風や日差しを遮ったり、屋上からの眺めを楽しむことができる、内径が600mをこえる世界最大級の木造建築になる予定です。我々や出展者は、こうしたシンボルやテーマを通じて、来場者がリアル、バーチャルで双方向のコミュニケーションが取れるように展開しますので、皆さまには、積極的に「未来社会の実験場」に「参加」していただきたいと思います。今回の万博は、こうした皆さまの「参加」という貢献があって初めて完成するといっても過言ではありません。

SDGsの達成に貢献することは、本博覧会の重要な使命の一つであると考えています。市民社会、NGOは、万博の新しい価値を共に創造する、という概念に貢献するステークホルダーになり得るでしょうか？

大阪・関西万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」は、まさにSDGsの達成に向けた取り組みです。SDGsの目標年が2030年で、万博はその5年前です。SDGsの達成に向けた取り組みの進捗状況を確認することができますし、さらに2030年の先に向けたビジョンや目標を見つけることができると期待されます。そして、今回の万博の全ての出展者は、SDGsの掲げる17の目標のうち1つ以上を選択して取り組むことと定められています。来場者がこうした展示に触れることにより、議論が促され、新しい視点や考え方を共有できる場になると期待しています。大阪・関西万博は、双方向のコミュニケーションによって全ての人々と共に創り上げる万博とすることをコンセプトとしていますので、市民社会やNGOはそのための大変重要なステークホルダーであると考えています。

私たちSGSIは、様々な共創のチャレンジを創造し、支援するための「共創パートナー（Co-Creation Partner）」の精神を信じています。そのためには何が必要で、万博のアジェンダに合わせた積極的な行動をとるためにはどういったことが必要になってくるのでしょうか？アドバイスをいただければ幸いです。

大阪・関西万博は、国内外を問わず多様なプレイヤーに積極的に参加してもらうことで、未来社会のデザインを共創することを目指しています。既に企画段階から民間企業・団体等からのアイデアを広く募っていますので、「Saving Livesいのちを救う」、「Empowering Livesいのちに力を与える」、「Connecting Livesいのちをつなぐ」という3つのサブテーマを、SGSならではの切り口で展開していただければ大変嬉しいですし、それが万博の支援につながると思います。どのような形の展開となるか、楽しみにしています。

## Interview

SGSはその活動全体を通じて地域に焦点を当てながら、若い世代に目を向けて社会の持続可能性を達成するためのビジョンを提示しています。SDGsの大きな課題を個人やコミュニティの声で解決するために、私たちが目指すもの、私たちが信じるものをアウトプットする場として、このエキスポを活用することは可能でしょうか？

SGSは、「社会における持続可能なガストロノミー」のコンセプトのもとに活動されていると伺っています。大阪・関西万博のテーマやサブテーマとは、様々な点で呼応しているのではないのでしょうか。「未来社会の実験場」には、リアル、バーチャルを問わず、皆さまからのアウトプットの場としての役目があります。是非万博の場を利用して、食の未来ビジョンについての積極的な発信・提案をお願いしたいと思います。こうした双方向のコミュニケーションによって万博がさらに深化し充実していく、それこそが「共創」だと考えます。

最後にお伺いします。日本から世界へ、世界規模で自らを再定義するかつてない機会を提供する万博ですが、2025年の大阪・関西万博が日本にとってどのような成果をもたらすことを期待されますか？

まずは、20年ぶりに日本で開かれるこの万博が、日本に明るい話題を提供することを期待しています。ここ数年暗いニュースが多かった印象がありますので、万博をきっかけに日本全体の雰囲気明るくポジティブなものに変われば良いと思います。その上で、万博開催が、世界の叡智を結集した新たなアイデアの創造発信、交流活性化によるイノベーションの創出、経済の活性化及び豊かな日本文化の発信に貢献することを期待しています。開幕に向けて今後更に機運を盛り上げていく必要がありますが、国内外からできるだけ多くの皆さまが来場し、展示やイベントを楽しむことを期待しています。そして、来場者が明るい未来を想像して、それを実現するためにはどのように行動すればよいかのヒントを一人一人がつかんでくだされば嬉しいです。そのために、我々は全力を尽くしたいと思います。





## 2023年から始まる：日本の地域間ネットワーク構築に重点を置く エンゲージメント・プラットフォーム

COVID-19の大流行は、人々が手頃な価格で栄養価の高い食品を入手できるようにする堅牢で弾力性のあるフードシステムの重要性を強調しました。また、生態系、健康、消費パターン、そして地球が相互に関連していることを改めて認識させる機会となりました。

日本食はすでに、安全で栄養価が高く高品質な食の、グローバルスタンダードとなっています。そして今、日本食はサステナビリティの世界標準となるべきだと私たちSGSは考えています。このSGSのコンセプトは、農家、生産者、その他フードチェーンに関わる人々が、持続可能な慣行に報いることを目的としています。持続可能な慣行に関する指標と組み合わせ、持続可能性の基準を段階的に引き上げ、社会全体の共通の利益としての食の規範とすることを目指します。

各地域には生産者から小売店、消費者に至るまで、多様で相互に関連した食の生態系が存在し、日本の豊かな食文化を支えています。

2025年の食の対話に向けて、各地域が様々なステークホルダーとともに何ができるかを明確なビジョンにまとめることが、私たちの目的です。地域ハブ相互のネットワークは、多様な参加者が、日本および世界のフードシステムを変革するための課題やイニシアチブを共に模索することを目的としています。これらはすべて、「エンゲージメント・プラットフォーム」と呼ばれる私たちの食の対話のビジョンに裏打ちされた、6つのエンゲージメント分野によって導かれていきます。

## SGS Pillar 1

# エンゲージメントプラットフォームはどのように運用されていくのか？

## なぜエンゲージメント・プラットフォームなのか？

私たちは、フードシステムの持続可能性を結びつけるものを作りたいと考えています。このためには、日本とヨーロッパの形式を超えている問題とフードシステムが多様な課題に直面するために適応しなければなりません。

2021年のフードシステムサミットとその関与プロセスは、17の国連持続可能な開発目標すべての進歩を実現し、さまざまな範囲の利害関係者が参加をしています。

SGSのエンゲージメントプラットフォームでは、食の持続可能性を共通の課題として含め、これらの取り組みを推進し、農場から食卓まで私たちの食生活を見直す努力をしています。

## エンゲージメント・プラットフォームは日本だけのもの？

これまで、SGSの活動はすべて日本が中心でした。私たちは、食に関わるすべての分野でサステナビリティを主要テーマとして主要テーマにヨーロッパと連携し、フードシステムのレジリエンスを高めるための対話の強化は遠からず実現できると認識しています。エンゲージメントプラットフォームは政治指導者、民間企業の意思決定者、NGO、市民を結集し、サステナビリティ推進に向け国民意識を高める、分野横断型の組織となります。

## SGSのビジョンは？

あらゆる場面で持続可能なフードシステムの重要性を伝え、政界や経済界のステークホルダーの連携による連携によるネクサス（結び目）を通じて食の未来を拓きます。

消費者の健康と生活の質の向上に貢献し、社会の健康関連コスト削減につながり、さらには健康的で持続可能な食生活の選択を容易にする良好な食環境を創造創造するため、包括的なアプローチを取ります。

食のバリューチェーンの各領域におけるこれまでの認識や価値観を革新的に変革するには、資源効率と食品の価値との関係を経済モデルの中核に据えることが必要です。

私たちの目的は、2025年までに様々な地域が多様な利害関係者とともに、持続可能な食に関する対話促進に向けて何ができるかについて、明確なビジョンを共有できるようにすることです。このハブ ネットワークは、多様な参加者が日本のフードシステムを変革するための課題とイニシアチブを共に模索、協力できるように設計していきます。エンゲージメントを6つの領域で推進し、それらを通じてエンゲージメントプラットフォームと呼ばれる「食の対話」のビジョンを支えます。

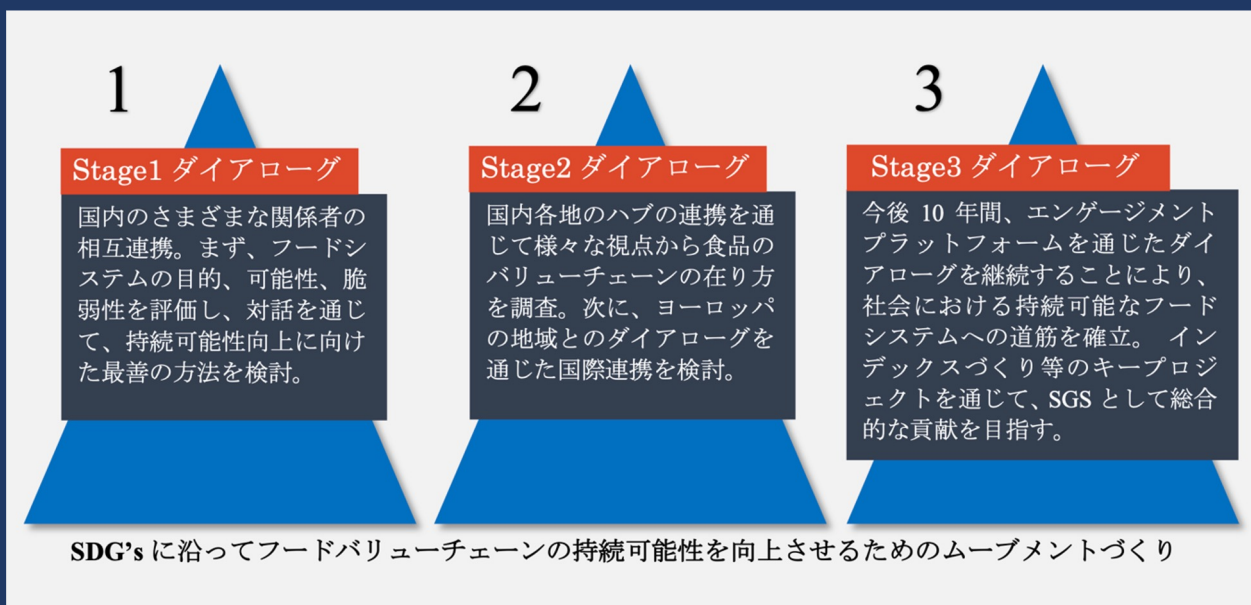
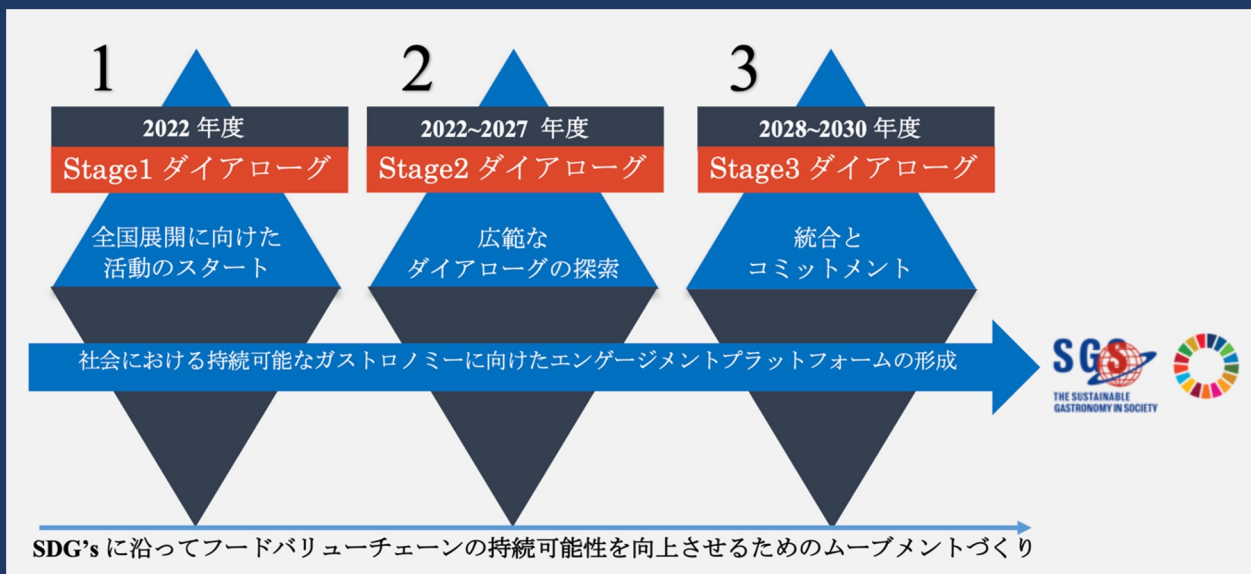
ダイアログでは、持続可能なフードシステムに向けた日本の道筋を明確にし、共有することを目的としています。これらの道筋は、今後数年間、地域間やすべてのステークホルダーにとっての指針となるものです。

日本のフードシステムのビジョンを達成するためのこの道筋における第一歩として、特に4つのイニシアチブに焦点を当てた奈良でのフォーラムを開催しました。

## SGS Pillar 1

# エンゲージメントプラットフォームは どのように運用されていくのか？

## エンゲージメント プラットフォームの説明



## 分析

# “フードシステムを再考する”

SGS' team

“私たちは今さまざまな負の連鎖に直面しています。生物多様性の減少は、新たなパンデミックの発生を助長し、そのパンデミックは私たちのライフスタイル、特に食の重要性を明らかにしました。私たちは、食が健康にとっていかに不可欠であるかということ益々認識させられています。”

私たちは長年にわたり、フードシステムを構成する農業、加工、流通の工業化、そして食の西洋化などに関係する体系的なリスクについて、警鐘を受け続けてきました。さらに、世界的に増加する健康リスクや新型コロナウイルスの大流行が気候変動や肥満、糖尿病の増加に加わり、あらゆる国にとっての脅威となっています。

### サイロ化した世界観からの脱出

回復力のあるシステムを創造し、設計するためには、生産・加工・流通そして消費の方法におけるイノベーションが必要であり、そこには想像力、節度さらには政治的意思の組合せが求められます。即ち、ソフトウェアの入れ替えが前提となります。

このような包括的なビジョンの実現には、過度に加工された食品（過加工食品）の削減、消費者教育はもとより、家畜への給餌方法を含め、正しい食品の選択を保證する製品構成のトレーサビリティが必要となります。この新たなフードシステムへの移行には、サプライチェーンの短縮も必要です。アグロエコロジックな農業を実現するためには、フードエコシステムの上流だけでなく下流も同時に見直すことが重要です。窒素化合物肥料と農薬のマーケットは見直され、種子へのアクセスは多様化され、新しい種が栽培される経路も多様化します。また、過加工食品の消費を抑えるには、食品産業よる、消費者に健康や環境へのインパクトについてのより適切な情報提供が必要です。

また、過加工製品の消費を減らすためには、食品業界が健康や環境への影響という観点から、食品の価値をより正しく伝えていく努力が必要です。

このような目標を達成するには、農業と食品の領土化を経由し、政策移行の実現のために様々なプレーヤーを動員する必要があります。それに向けて、SGSでは独自のネットワークを駆使した参加型プラットフォームを導入し、新たなシナリオを起案します。それは、環境、健康だけでなく経済と社会を取り巻く様々な課題を包括的に結びつけ、解決に寄与するツールとなるでしょう。

このシナリオにおいては、フードシステムにおいて食品が単なる商品として扱われることを無くし、食品の価格と価値に関する誤った認識を防ぐためにはどのような公共政策が必要かも提言します。そして食品の非経済的側面や、その健康のための役割、また文化的基盤としてのフードシステム再構築の必要性を示したいと考えています。

昨年 11 月に奈良で行われた「SGS 私たちの宣言」では、食の価値を低下させるコモディティ化を避けつつ、文化的基盤としての食と健康におけるその役割をコングッド（社会全体の共通善）として捉えること、ヒトに関わるさまざまな食品の価値を再評価することの重要性を強調しました。これは、物質的、生物的、社会的、文化的、健康的側面を統合し、農業、食品、健康を総合的にとらえる生態学的モデルの推進を意味すると、私たちは考えています。



## SGSフレンドの紹介:

### oriGIn (オリジン):

健全な持続可能性指針指針と強固な法的枠組み構築のために活動するGI（地理的表示）のグローバルアライアンス

[www.origin-gi.com](http://www.origin-gi.com)

マッシモ・ヴィットーリ氏: oriGIn, マネージングディレクター



国際地理的表示ネットワーク機構（OriGIn）は、ジュネーブ（[www.origin-gi.com](http://www.origin-gi.com)）を拠点とする非営利の非政府組織（NGO）です。

2003年に設立されたoriGInは、現在、様々な分野の地理的表示（GIs）団体・機関が参加するグローバルアライアンスで、40カ国から約600の団体・機関が参加しています。

#### メンバーの種類

##### - グループ:

国内の法的枠組みに応じた専門職種間、例としてConsorti、Consejos Reguladores、特定のGIの生産者およびその他のバリューチェーンの利害関係者の代表(正会員)

##### - 特定の国の同じ分野、または複数の分野のGIグループを代表する団体:

例えば、スイスフードGIの協会（正会員）

このような背景から、oriGInは国際的なGI運動の効果を高めるために、オリジンのロゴが持つ高い国際的認知度を考慮し、各国のアンテナ組織（例：オリジン・ペル）の設立を奨励しています。各国におけるoriGInアンテナ組織を設置するためには、その国で認められているGIを代表する団体であり、oriGInの会員であることが必要です。

##### - oriGInの趣旨に賛同する個人および機関:

大学、法律事務所、知財事務所、NGOなど（準会員）

oriGInの目的は以下の通りです。

1. 国内法および国際条約に基づいてGIをしっかりと保護するためのキャンペーンを行う。
2. 新たな経済的、社会的、環境的課題に対応するためのバリューチェーン管理モデルを推進する。

長年にわたり、oriGInは、世界知的所有権機関（WIPO）やInternet Corporation for Assigned Names and Numbers（ICANN）といった主要な国際的・地域的フォーラムにおいて、GIグループの代弁者となってきました。これらのフォーラムにおいて、またメンバーとの協力のもと、oriGInは、知的財産保護のための公正かつ透明な法的枠組みを支持する見解を定期的に表明しています。

同様に、oriGInは、持続可能性をめぐる国際的な議論にますます深く関わっています。歴史的に見て、市民社会が企業やブランドに対し、従業員や地域社会の環境や社会福祉への影響について疑問を呈し始めるずっと前から、地理的表示製品はジェンダー平等、働きがいのある人間らしい仕事、気候、環境悪化などの問題に敏感でした。まず第一に、環境問題に関しては、「非地域化」はスキーム自体と両立しないため、そのような製品は生産を他の場所に切り替えることはできません。地理的表示（GI）が長期的に存在し、繁栄し続けるためには、与えられた地理的地域の資源と自然資本が保全されなければならない。これが、消費者の嗜好に合わせながら、ある地域に深く根ざしたいくつもの高品質な食品が何世紀にもわたって存在し続けている理由です。さらに、社会的・経済的な観点から見ると、GI製品はその地域社会にとって不可欠な存在です。バリューチェーンに沿った全ての関係者に価値を生み出し、公正に分配する能力は、その成功の重要な要因です。これは、関連する利害関係者が「consejo reguladores」、「Associations interprofessionnelles」、「consorzi」などの構造内に代表されることを可能にする「ローカル バリュー チェーン ガバナンス」を通じて達成されます。それぞれの地域で提携関係を築き、経済関係者、規制当局、地方自治体との協力を適した環境を作り出します。

これらの理由から、oriGIn は FAO と提携して、GIグループが持続可能な資産を理解し、より適切に伝達し、規制当局と消費者の新たな社会的要求に対応するためのロードマップを作成することを支援しています（「FAO-oriGIn 地理的表示のための持続可能性戦略」）。

私たちは、日本のGIが持続可能性の課題に対応するのを助けるために、地元の生産者や当局、SGSと協力して、日本でそのような方法論を適用する可能性を探ることに取り組んでいます。

The logo for oriGIn, with 'ori' in black and 'GIn' in a bold, green font.

Organization for an International  
Geographical Indications Network

## SGSフレンドの紹介:

### Hectar (エクター):

目指すは世界最大の農業キャンパス  
持続可能性と再生可能性の両立を指向

<https://www.hectar.co/>



2021年、Hectar (エクター) キャンパスがオープンしました。このキャンパスは、農業の転換期におけるソリューションの創造と、起業家精神とテクノロジーに100%焦点を当て、人々に世界でもユニークなエコシステムを提供します。

Hectarの使命は、農業にポジティブな影響を与えようとする起業家たちに寄り添うことです。影響とは、生態系、食の変遷、持続可能な経営、気候変動などの分野における多面的な影響のことであり、SGSと共通の使命です。日本と同様、フランスでも農業は国土の70%で行われていますが、農業従事者の不足は深刻で、起業家精神や目的意識を持ったリーダーシップ、指導者の必要性が各地域で叫ばれているのです。

Hectarは独自のエコシステムをもたらします。

- キャンパス : トレーニングキャンパス、スタートアップとイノベーションのためのアクセラレーター、再生農業型の試験農場、コワーキングスペース、セミナー、若者の意識改革で構成されています。
- 試験農場 : 農地土壌を保全するための再生農業の実験を300ヘクタール以上で行っています。レ・ネフリエでは、土壌の働きを最大限に制限し、被覆作物や関連作物が栽培されています。輪作の多様化も始まっています。畑作物と家畜の相補性が戦略の中心で、特に牛にインタークロップを食べさせることで、その効果を上げています。
- 新しいフードテックエコシステム : HEC Paris インキュベーターとの提携により、アクセラレーターHectarはアグリフードテック分野における欧州の未来のリーダーを支援します。
- Hectar Connect (エクターコネクト) : 農業変革の担い手を繋ぐ人材育成のプラットフォーム。企業や協同組合に、農家ネットワークへの同行と技術力向上の機会を提供する新しい取り組みです。

Hectarのビジョンは、毎年、都市部や農村地域の若者、または恵まれない環境にある若者を集め、彼らにビジネスのセンスを身につけさせ、持続可能な農業ベンチャーを生み出し、投資家を引きつける農業の起業家にするというもので、SGSではこのような取り組みに賛同しています。私たちが Hectarの活動を紹介し協力していくことは当然のことであり、今後その範囲を拡大することを期待しています。私たち SGSは、起業家精神が、明日の農業がAIによって近代化、多様化、加速化される移行に向けた踏み台であると確信しています。Hectarは、SGSが相互利益に向けて力を結集することのできるアクセラレーターになるでしょう。

